

# 延慶本平家物語の行家

——頼朝・義仲・義経との関係をめぐって——

平 城 三 矢 子

## はじめに

源行家は、頼朝・義仲・義経ら源氏三者の叔父であり、三者それぞれと行動を共にして、源平争乱の世を生きた。平家物語におけるその登場場面は、頼朝・義仲・義経に比べ非常に少ないが、巻四「源氏揃」から巻十二「泊瀬六代」までの、源氏蜂起から頼朝政権の確立に到るまで、登場し続ける。

平家諸本で行家に関する記事を比較すると、語り本系諸本では、簡略化し、また消失しており、行家の存在は希薄なものとなっている。しかし、延慶本・長門本・盛衰記の読み本系三本には、語り本系諸本より多くの、また詳しい行家関係記事が収録されており、なかでも延慶本だけが、登場場面から、その死の場面までの記事を揃えもつ。

行家に関する先行研究には、まず人物論として、吉田晴洋氏が、延慶本を中心に諸本の行家関係記事、『玉葉』『吾妻鏡』などの史料の記事を用いられながら、行家は、以仁王事件そして源氏蜂起の発端・敗戦の将・源氏の内訌の要因・頼朝の同族処分の過酷さの強調という、物語中における「絶妙な働き」を担っていると指摘されている<sup>(1)</sup>。一方

佐倉由泰氏は、覚一本を中心に諸本の行家記事を総合して、行家は、作品世界の表層を滑るのみで、作品の叙事の展開を主導的に進める機能を果たす事のない、捉えどころのない存在として描かれており、『平家物語』に設けられている多くの枠組み・型・「ものがたり」が行家の形象に当てはめられていないと考察されている<sup>(2)</sup>。物語の構造に関わる論として、服部幸造氏は、行家とその兄義憲の二人に着目され、義憲は常に行家と共に語られており、そこには同じ為義の子として生まれ、戦えば必ず敗れ、頼朝に敵対し、度々の合戦に功績を残すこともなく散っていった二人を並べて描く、作者の意図があることを指摘され<sup>(3)</sup>、また早川厚一氏は、征夷大將軍の官宣旨を得た頼朝が、以仁王の令旨を帯して挙兵した義仲・行家を制圧し、世を取るという、平家物語の歴史叙述を解明されている<sup>(4)</sup>。

本稿では、行家と、頼朝・義仲・義経が関わり合う場面に焦点を当てる。延慶本において、行家を中心に据え、頼朝・義仲・義経との関係が、どのように描かれているかを探りたい。それは、吉田晴洋氏の、行家は「源氏の内訌の要因」というご指摘<sup>(5)</sup>から一歩踏み込んだ、延慶本に描かれる源氏の内部抗争の構造を、その一端ではあるが明らかにすることに繋がる。

諸本比較と、『玉葉』『吾妻鏡』との比較を通して、延慶本をみていく。諸本は、長門本・源平盛衰記・四部合戦状本・覚一本を対象とする。『玉葉』『吾妻鏡』は、客観的史料ではないが、延慶本の叙述を浮かび上がらせるために、比較は有効であると考ええる。

## 一 頼朝、義経への令旨伝達

行家の初登場は、第二中八「頼政入道宮ニ謀叛申勸事」、そして第二中十「平家ノ使宮ノ御所ニ押寄事」に記されている、高倉宮令旨伝達の場面である。

高倉宮謀叛の際の、行家の令旨伝達に関する先行研究には、まず赤松俊秀氏により、長門本が延慶本と異なり、義盛改名行家による頼朝への令旨伝達、頼朝にあてた特別な令旨に触れないことについて、長門本には写し誤りがみられ、記事に混乱が生じていることから、原本は延慶本に近いという行家令旨伝達記事の古態性の分析がなされている<sup>(6)</sup>。また櫻井陽子氏は、『明月記』『玉葉』と『愚管抄』の記事の比較から、宮の令旨と頼朝の挙兵とが結びつけられるのは事件当時の認識ではないことを指摘され、「平家物語は後年の歴史解釈によって以仁王の乱と頼朝挙兵とを明確に結びつける」とされている<sup>(7)</sup>。

高倉宮謀叛事件を収録する平家諸本をみると、延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本・覚一本があげられるが、高倉宮の令旨の使節として行家を関与させるのは、延慶本・盛衰記・覚一本となっている。延慶本において行家が、高倉宮謀叛と頼朝挙兵を結ぶ令旨の使節として、どのように描かれるかをみていく。

延慶本の問題とする箇所を引用する。

新宮ノ十郎ヲ召シテ、「令旨ヲ持テ頼朝ガ許ヘ下レ」ト仰下レケレバ、「勅勘ノ身ニテ候ヘバ叶候マジ」ト申セバ、「其謂有」トテ新宮ノ十郎ヲ藏人ニナサレテ、義盛ト名乗ケルヲ改名シテ、行家ト名乗ラセケリ。仍新宮十郎藏人行家、高倉宮ノ令旨ヲ給テ、治承四年四月廿八日ニ潜ニ都ヲ出ニケリ。同五月八日、伊豆ノ北条ヘ下着テ兵衛佐ニ宮ノ令旨ヲ献ル。兵衛佐此令旨ヲ給テ国々ノ源氏等ニ施行セララル。

この記事の内容は、『玉葉』と『吾妻鏡』に確認できる。

『玉葉』治承四年九月三日条に、

又為義の息、一兩年來熊野辺に住して、去る五月乱逆の刻、坂東方に赴き了り、かの義朝の子に与力し、大略謀叛を企つるか。

と記され、高倉宮謀叛をきっかけに、行家が坂東に向かったことが把握されている。しかし、行家が宮の令旨を頼朝にもたらしたと考えられていないようである。

『吾妻鏡』治承四年四月九日条では、

陸奥十郎義盛<sup>⑧</sup>廷尉為義の末子。折節在京の間、この令旨を帶して東國に向ひ、まづ前兵衛佐に觸るるの後、そのほかの源氏等に傳ふべきの趣、仰せ含めらるるところなり。義盛、八條院の藏人に補せらる。名字を行家と改む。

とあり、行家に対する令旨の使いとしての命、藏人に補されたこと、義盛から行家への改名が、延慶本と共通している。

延慶本が独自に描く箇所注目する。

「勅勘ノ身ニテ候ヘバ、叶候マジ」ト申セバ、其謂有トテ新宮ノ十郎ヲ藏人ニナサレテ、義盛ト名乗ケルヲ改名シテ行家ト名乗ラセケリ。

と、行家は自らの「勅勘」を問題にし、令旨の使いとなる資格がないことを述べる。この行家の言葉をうけて藏人任命、改名という運びとなる。

諸本を比較すると、源平盛衰記では、

三位入道申しけるは、「令旨の御使いを勤め候はんには、無官にてはその恐れあるべし」と申せば、「然るべし」とて、当座に藏人になされけり。十郎藏人は義盛を改名して行家と名乗る。

と、無官では宮の使節としての正当性に欠ける、という頼政の配慮から藏人にされており、覚一本では、

熊野に候、十郎義盛を召して、藏人になさる。行家と改名して、令旨の御使に東国へぞ下りける。

と事柄のみを述べ、行家の「勅勘」は問題にされない。

この「勅勘」という言葉は、延慶本では全九例あり、内四例が頼朝の言葉のなかに表れる。頼朝に課された大きな問題であつた。

佐宣ヒケルハ、「去永暦元年ノ春ノ比ヨリ、池殿尼御前ニ命ヲ被生奉テ、当国ニ住シテ、既廿余年ヲ送りヌ。池殿仰セラルル旨アリシカバ、毎日法花経ヲ二部読奉テ、一部ヲバ池尼御前ノ御菩提ニ廻向シ奉リ、一部ヲバ父母ノ考養ニ廻向スル外ハ、又二ツ當ム事ナシ。勅勘ノ者ハ、日月ノ光ダニモアタラズトコソ申伝タレ。争カ此身ニテサ様ノ事ヲバ思立ベキ」ト詞ニハ宣ケレドモ、  
(第二末七「文学兵衛佐二相奉ル事」)

傍線部に見られるように、自分は勅勘の者であるという意識が記される。また、

其後文学又来リケレバ、佐対面シテ、「サテモイカバシテ勅勘ヲユリ候ベキ。サナクハ何事モ思立ベクモナシ。イカサマニモ道アル事コソ、始終モヨカルベケレ。  
(第二末七「文学兵衛佐二相奉ル事」)

頼朝の、勅勘をはらさなければ事を起せないという意識がみられる。そして、

同九月四日、鎌倉へ下着テ、(略)「兵衛佐被申候シハ、『頼朝ハ勅勘ヲ蒙ト雖モ、翻テ御使ヲ奉テ、朝敵ヲ退ケ、武勇ノ名誉長ジタルニヨテナリ。忝クモ居乍ラ、征夷大將軍ノ宣旨ヲ蒙ル。勅勘ノ身ニテ直ニ宣旨ヲ請取奉事、其恐アリ。若宮ニテ請取奉ベシ』ト候シカバ、  
(第四・十六「康定関東ヨリ帰洛シテ関東事語申事」)

「頼朝ハ勅勘ヲ蒙ト雖モ、翻テ御使ヲ奉テ」としながら、「勅勘ノ身ニテ直ニ宣旨ヲ請取奉事、其恐アリ」としており、征夷大將軍の宣旨が下されるまで、自分自身を「勅勘ノ身」と認識していることに注目する。これ以降、頼朝が自身の勅勘を問題にすることはない。

石井進氏は、「〔玉葉〕寿永二年」十月九日の小除目によって、頼朝はじめて正式に本位に復し、「勅勘」をゆるさされた。」と指摘されている<sup>(9)</sup>。物語では、征夷大將軍の宣旨が、頼朝の初めての任官である。この、復任したときが勅勘宥免のときであるという意識が頼朝にあてはめられており、また同じく行家にもあてはめられていると考えられる。それは同時に、平治の乱に敗れた朝敵としての意識が、頼朝同様行家にも持たされていることを表す。

行家はこの令旨伝達場面で、「新宮ノ十郎」として呼びだされており、それは平治の乱後、新宮に潜伏していたことによる呼称である<sup>(10)</sup>。またこの後に、

行家ハ平治ヨリ以来、熊野ニ居住シケレバ、新宮ニ与力スル者多カリケレバ、何ト無ク其用意ヲゾシケル。

(第二中十「平家ノ使宮ノ御所ニ押寄事」)

行家が熊野新宮で、蜂起する準備をしていたことが描かれている。

そして高倉宮謀叛事件発覚の際、

入道相国、此人々ニ向テ宣ケルハ、「哀レ、新（宮）ノ十郎女ヲ平治ニ失フベカリシヲ、入道ガ青道心ヲシテ捨置タレバ、今カ、ル事ヲ聞ヨ。頼朝ガ事ハ、池尼御前イカニ申給トモ、入道宥サズハ、争カ命ヲ生ベキ。安ラヌ事哉」トテ怒給ケリ。後悔先ニ立タズトハ、加様ノ事ヲ云ニヤ。  
(同右)

清盛の、平治の後悔の言葉に、行家が現れる。この傍線部の言葉を記すのは、延慶本のみである。延慶本では、行家は平治の乱の敗北を抱え、その雪辱を期する存在として、頼朝と共に注視されているといえよう。  
次に、第二中十「平家ノ使宮ノ御所ニ押寄事」に記される行家令旨伝達記事をみていく。

同日（治承四年五月十五日）ニ高倉宮ノ御謀叛ノ事顕ハレ御ス。去ジ四月廿八日二十郎藏人行家高倉宮ノ令旨ヲ潜ニ給テ伊豆国ヘ下テ兵衛佐ニ奉リ、案ヲ書テ義経ニ見セムトテ其ヨリ奥州ヘ趣キケリ。

行家がまず頼朝に令旨をとどけ、その後写しを、行家の判断により義経へと届けにいつていることに注目する。

源平盛衰記では、

先づ近江国には、山本・柏木・錦織にかくと知らせて、令旨の案書を与へて美濃・尾張へ越ゆ。山田・河辺・泉・津野・芦敷・関田・八島に触れ廻り、又案書を与へて信濃へ越ゆ。岡田・平賀・木曾次郎に相触れ、又案書を与へて甲斐へ越ゆ。武田・小笠原・逸見・一条・板垣・安田・伊沢に相触れて、案書を与へて、伊豆国北条に打越えて右兵衛佐殿にかくと言ふ。(略)

延慶本平家物語の行家

行家は伊豆より常陸へ越えて、兄なれば信太に知らせ、佐竹に告げて、案書を与へて、姪なれば告げんとて、奥州へこそ下り  
けれ。

近江国から美濃・尾張、そして信濃、甲斐へと順に廻つて案書を与えた後、頼朝へ伝えている。その後伊豆より常陸  
へ越え、そして奥州へと都近くから順番に各地の源氏に触れ回っている。

覚一本の記述をみる。

都をたつて近江国より始めて、美濃、尾張の源氏共に次第にふれてゆくほどに、五月十日、伊豆の北条にくだりつき、流人  
先兵衛佐殿に令旨奉り、信太先生義憲は、兄ならばとらせんとて、常陸の国信太浮島へくだる。木曾冠者義仲は、甥ならばた  
ばんとて、東山道へぞおもむきける。

近江国より、美濃、尾張に触れた後、頼朝へ、その後は常陸の国、そして信濃へと、諸国廻宣の役目を担っているこ  
とは、盛衰記と共通している。頼朝への伝達は、諸国の源氏へ触れながらの通過点としての意味合いが加わり、延慶  
本の、まず頼朝へ、という意識が、盛衰記と覚一本では薄れている。

『吾妻鏡』治承四年四月廿七日条の記事では、

高倉王の令旨、今日前武衛將軍の伊豆國の北条の館に到著す。八條院の蔵人行家持ち来るところなり。武衛水干を装束き、ま  
づ男山の方を遙拝したてまつるの後、謹みてこれを披閱せしめたまふ。侍中は甲斐・信濃兩國の源氏等に相觸れんがために、  
すなはちかの國に下向す。



まっすぐ頼朝へと届けたことは延慶本と共通するが、その後は甲斐・信乃の源氏らへの伝達となっている。

延慶本では、頼朝・義経が高倉宮の令旨を受け取るべき人物として、特別視して描かれているといえる<sup>(1)</sup>。そして行家を、この二人とつながりある存在とする意識が、延慶本の記述から読み取れる。

## 二 頼朝からの離反と義仲への依存

第三末七「兵衛佐木曾ト不和ニ成事」の記事は、行家と頼朝・義仲三者の交点である。頼朝と義仲が不和となる、その原因について、四部本・語り系諸本は詳述せず、読み本三本は、二つの出来事を記す。延慶本・長門本は、まず第一義として行家の頼朝からの離反があり、それに第二義として武田信光の讒言が加わる。源平盛衰記は、第一義に武田の讒言をおき、行家の離反はそれに追い討ちをかけるという構成である。このことにより、源平盛衰記においては、原因としての行家の比重は、軽くなっている。

このいわゆる清水冠者事件における、行家に関する先行研究として、武久堅氏は、義仲にとって、頼朝から離反した行家を引き受けたことは、手書き大夫房覚明を得る契機となったこと、そして頼朝との直接対決を避け、清水の冠者を人質として派遣した真意は、戦による信濃在地の人々の犠牲回避にあったことを解明されている<sup>(2)</sup>。

二章では、不和の原因として行家がどう描かれているかを捉えながら、行家と頼朝・義仲の関係をみていきたい。冒頭部分に、行家が頼朝から離反するに至る過程が描かれる。

去比ヨリ、兵衛佐ト木曾冠者ト不和ノ事有テ、木曾ヲ討ムトス。其故ハ、兵衛佐ハ、先祖ノ所ナレバトテ、相模国鎌倉ニ住ス。叔父十郎藏人行家ハ、大政入道ノ鹿嶋詣トシテ造儲タリケル、相模国松田御所ニゾ居タリケル。所領一所ナケレバ、近隣

ノ在家ヲ追捕シ、夜討強盜ヲシテ世ヲスゴシケリ。或時行家、兵衛佐ノ許ヘ文ニテ云ヤリタリケルハ、「行家ハ御代官トシテ、美乃国墨保ヘ向事十一度、八ヶ度ハ勝テ三ヶ度ハ負ヌ。子息ヲ始トシテ、家子郎等ドモ多ク打トラレテ、歎申ハカリナシ。国一ヶ所預タベ。是等ガ孝養セム」トゾ書タリケル。兵衛佐ノモトヨリ即返事有。「木曽冠者、信乃上野両国ノ勢ニテ、北陸道七ヶ国打取テ、既九ヶ国ガ主ニナリテ候。頼朝ハ六ヶ国コソ打シナヘテ候ヘ。御辺モイクラノ国ヲ打取トモ、御心ニテコソ候ハメ。サテコソ院内見參ニモ入セ給テ、打取国何ヶ国トモ、注申サレテ給ワレセ給ハメ。当時頼朝ガ支配ニテ、国庄ヲ人二分給ベシト云仰ヲモカブリ候ワズ」ト有ケレバ、行家「兵衛佐ヲタノミテ、ヨニ有ムコトコソアリガタケレ。木曽冠者ヲ恃ム」トテ、千騎ノ勢ニテ信乃国ヘ越ニケリ。兵衛佐是ヲ聞テ、「十郎藏人ノ云ワム事ニテ、木曽冠者、頼朝ヲ責ムト思心付テムズ。襲ワレヌ先ニ木曽ヲ討ム」ト思ケルヲリフシ、

まず、行家が「所領一所」もなく、「近隣ノ在家ヲ追捕シ、夜討強盜ヲシテ世ヲスゴシケリ。」と描かれている事に注目する。

この「強盜」という言葉は、延慶本中、全五例あるが、個人の行動として描かれるのは行家のみである。また、「強盜」の語例ではないが、三浦介義明の言葉に、

サテ三浦介義明ガ許ヘ御文持向タリケレバ、（中略）是等ヲ前ニ呼テ申ケルハ、（中略）各々早く一味同心ニテ、佐殿ノ御許ニ參ズベシ。若冥加オワセズシテ、打死ヲモシ給ハハ、各又頭ヲ一所ニ並ブベシ。山賊・海賊ヲモシタラバコソ瑕瑾ナラメ。佐殿、若シ果報ヲハシテ、世ヲ執（給）ハハ、己等ガ中ニ二人モ生残タラム者、世ニ逢テ繁昌スベシ」ト申ケレバ、

（第二末十二「兵衛佐国々ヘ廻文ヲ被遣事」）

傍線部箇所「山賊・海賊ヲモシタラバコソ瑕瑾ナラメ」と、強盜行為に走るとは、武士にとつての瑕瑾であるとき

れている。行家は、堕ちた武士として描かれているといえよう。

そして行家は、頼朝に手紙で、頼朝の「御代官」であることを主張し、戦歴を披露し、子息・家子郎等を討たれ「嘆申スハカリナキ」由を訴え、「考養」の為にと、所領の無心をする。

このような行家に対して、頼朝は、

木曾冠者、信乃上野両国ノ勢ニテ、北陸道七ヶ国打取テ、既九ヶ国ガ主ニナリテ候。頼朝ハ六ヶ国コソ打シナヘテ候へ。御辺モイクラノ国ヲ打取トモ、御心ニテコソ候ハメ。サテコソ院内見参ニモ入セ給テ、打取国何ヶ国トモ、注申サレテ給ワレセ給ハメ。当時頼朝ガ支配ニテ、国庄ヲ人ニ分給ベシト云仰ヲモカブリ候ワズ。

と行家の訴えを退ける。この頼朝の言葉について、武久堅氏は、「北陸道七ヶ国」の管領は、義仲入洛直前の情勢であり、寿永二年春の段階では、まだ実現していないため、頼朝のこの返答には「史実の展開面で整合性の綻び」があり、物語において作られたものであることを指摘されている<sup>13)</sup>。

この作られた頼朝の返答は、『吾妻鏡』元暦二年八月四日条に、

前備前守行家は、二品の叔父なり。しかるに度々平家の軍陣に差し遣はさるといへども、つひにその功を顕はさざるによつて、二品あながちに賞翫せしめたまはず。備州また進みて参向することなし。

と記される中の「二品あながちに賞翫せしめたまはず」という頼朝の態度と共通する。しかし、続く「備州また進みて参向することなし」という記述は、延慶本の、頼朝を「恃ム」行家の姿とは離れる。延慶本では、頼朝を「恃」んで拒まれる行家と、行家を突き放す頼朝とが、描かれている。

そして行家は、

兵衛佐ヲタノミテ、ヨニ有ムコトコソアリガタケレ。木曾冠者ヲ恃ム。

と義仲へと走る。この行為が、頼朝の義仲に対する猜疑心を引き起こす。

兵衛佐是ヲ聞テ、十郎藏人ノ云ウム事ニテ、木曾冠者、頼朝ヲ責ムト思心付テムズ。襲ワレヌ先ニ木曾ヲ討ムト思ケルヨリフシ、

この「十郎藏人ノ云ウム事ニテ」という言葉は、頼朝によってくり返し述べられていく。

・佐大ニ怒テ、「十郎藏人ノ語ニ付テ、サル支度モアルラム」トテ、ヤガテ北国へ向ムトシケルヲ、

(第三末七「兵衛佐与木曾不和ニ成事」)

・(略)一族ノ儀ヲ忘テ平家ト同心セラル、由漏レ承ハル間、実否ヲ承ラムガ為ニ是マデ参向スル所也。十郎藏人ノ云ウム事ニ付テ、頼朝ヲ敵トシ給カ。  
(同右)

行家が義仲追討の理由であることが強調されている。

この後頼朝は義仲に、敵対心無き事の証として、行家もしくは義仲の成人した息子の引渡しを迫る。これに対して義仲は、

生年十一才ニ成、清水冠者義基ヲヨビヨセテ、「人ノ子ヲワギミホドマデソダテ、他人ノ子ニナスベキニテハアラネドモ、十郎藏人ハ『帰ラジ』ト宣フ、ナニカハクルシカルベキ。イソギ佐殿ノ方へ行ケ。果報ナカラムニハ、一所ニ有トテモ叶マジ。冥加アラバ、所々ニ有トモ、ソレニモヨルマジ。トク／＼出立ベシ」

（第三末七「兵衛佐与木曾不和ニ成事」）

と、あくまで「帰ラジ」と、義仲の許に居続ける意向を示す行家を受け入れ、代わりに子息清水冠者を頼朝に差し出すことを選んだ。

義仲は入京後、この時のことを次のように語る。

行家ハ頼朝ニ追放セラレテ、義仲ガ許ニ来ル。叔父為リト雖モ、已ニ猶子為リ。義仲ニ対シテ賞ヲ行ハルベキ者ニアラズ。

（第四・一「高倉宮第四宮位ニ付給ベキ由事」）

行家の行動は、頼朝による「追放」であったとされる。

この場面では、行家が頼朝によって突き放され、そして義仲に受け入れられる、という物語上の構図が読み取れることを、押さえておきたい。

### 二三 義仲との対立

平家を追い落とし、入京した後、行家と義仲は権力を争い対立していく。その最たる様子が記されているのが、第四・廿一「室山合戦事付諸山宣旨成サル事付ケタリ平家追討ノ宣旨ノ事」の中の、行家播磨下向の記事である。

平家物語における、水嶋合戦・備中瀬尾合戦・室山合戦・法住寺合戦という記事配列が史実と異なることは、夙に指摘されているが、今回問題にする箇所について改めて史料と比較したい。

表一 史料との記事配列の比較

『玉葉』『百鍊抄』『二代要記』		延慶本	
寿永二年 十月十二日	備中瀬尾合戦、義仲勢勝利	寿永二年 十月一日	水嶋合戦、義仲勢敗北
閏十月一日	水嶋合戦、義仲勢敗北	十月四日	義仲、播磨へ発向 備中瀬尾合戦、義仲勝利 備中国万寿庄に布陣
閏十月十五日	義仲帰京	十一月二日	義仲帰京 行家、義仲を避け播磨下向
十一月八日	行家、平家追討の為播磨下向		

上段に挙げたように、史料においては、義仲はまず備中瀬尾での合戦に勝利したあと、水嶋合戦で敗れ、その後帰京。行家は義仲帰京後、平家追討使として、播磨へ下向している。対して下段の延慶本においては、水嶋合戦敗北の知らせを受けた義仲が、播磨へ下向し、備中瀬尾合戦に勝利。その後備中国万寿庄へ勢揃えし、平家と対戦の構えをしたところ、京からの早馬を受け、帰京。同時に行家は、義仲を避けるため出京し、播磨へ向かったとする。

物語で、義仲が勝ち戦にのり平家と対戦というその時、早馬が伝えた事は、行家の都での行状であった。義仲に帰京を余儀なくさせた原因として、行家が設定されている。

本文を挙げる。

猿程ニ、京ノ留守ニ置タリケル樋口ノ次郎兼光、早馬ヲ立テ申ケルハ、「十郎藏人殿コソ、イタチノナキ間ニ貂ホコルラム風情、院ノ切人シテ、殿ヲ誅チ奉ラムト支度セラレ候ナレ」ト告タリケレバ、木曾大ニ驚テ、平家ヲ打捨、夜ヲ日ニ繼テ都ヘ走上ル。十郎藏人ハ是ヲ聞テ、木曾ニ違ワムトテ、十一月二日、三千余騎兵ニテ京ヲ出、丹波国ヘカ、リテ、播磨路ヘゾ下リケル。木曾ハ摂津ヘ懸テ入京。

樋口次郎の早馬により、「イタチノナキ間ニ貂ホコルラム風情」と、自分より強い者のいないところで威勢を振るう、小者で卑怯な行家の様子が伝えられる。この「鼬なき間の貂ほこり」の用例は、管見では平家物語より以前では見つけていないが、『宇津保物語』（「菊の宴」）に、

大宮「いひ知らぬが中にも、雑役の藏人などにも仕うまつりぬべき者侍らば参らせむ、と思ひたまふるを、やむごとなき人、あまた候ひたまふ、と承れば、鼬の間なき心地してなむ」。東宮、うち笑ひたまひて、「参りたまはむほどこそ、心地には、鼠の心地もすべかなれ。いとさな思しそや。（略）」

傍線部に見られるように、「鼬」に対して「鼠」の使われている用例があった。意味は同じであると思われるが、平家物語では、鼠ではなく鼬と同類の貂を用いられていることは、同じ源氏でありながら、義仲と違って実力のない行家を表現する意図が含まれているのではないだろうか。

そんな行家が「院ノ切人」となって院を味方につけ、義仲を討つ支度をしているとの告げに、義仲は、平家との対戦を捨て「夜ヲ日ニ繼テ」帰京する。

「院ノ切人」と行家が評される背景は、『玉葉』の記事よりうかがえる。寿永二年九月二十三日条の、

行家を追討使に遣はすべき由、院より再三義仲に仰せらる。義仲左右を申さず。俄に以て逃げ下る。行家を籠めんと云々。

という法皇からの行家への追討令の存在や、閏十月二十九日条に記される、

この日奈良僧正来らる。(略) 先づ二十七日参上の処、行家と御双六の間、他事無し。見参に入ると雖も、空しく退出し、昨日参上し仰せを奉ると云々。

法皇が行家と双六に耽る様子、また十一月七日条、

伝へ聞く、義仲征伐せらるべき由により、殊に用心、鬱念の余り、かくの如く承り及ぶ由、院に申さしむと云々。仍つて院中の警固の武士に入れられ申し了ぬと云々。行家已下、皆悉くその宿直を勤仕す。而るに義仲一人その人数に漏るる由、殊に奇となす上、又中言の者あるか。

院中の警固の武士に、行家が筆頭に任命されている。このように、行家は院と密に繋がっていた。

しかし『玉葉』には、次のような記事が見られる。寿永二年閏十月十八日条、

義仲の所存、君偏に頼朝を庶幾ひ、殆どかれを以て義仲を殺さんとせらるるかの由僻推をなすか、将告げ示す人あるかといへり。かくの如き間、法皇を怨み奉り、兼ねて又御逐電の事を疑ふ。これに依り忽ちに敗績の官軍を捨てて、迷ひ上洛する所なり。



義仲の帰京の原因は、頼朝と法皇の同盟による、義仲誅罰を危惧してのことであつたと記されている。またこの背景には、閏十月二十日条、

（義仲）申して云はく、君を怨み奉る事ニケ条、その一は、頼朝を召し上げらるる事然るべからざる由を申すと雖も、御承引無く、猶以て召し遣はされ了んぬ。この二は、東海東山北陸等の国々に下されし所の宣旨に云はく、若しこの宣旨に随はざる輩に於ては、頼朝の命に随ひ追討すべしと云々。この状義仲生涯の遺恨たるなりと云々。

法皇が義仲の反対にも拘らず、頼朝を召し上げられたこと、そして義仲播磨下向の間に下された、頼朝の軍事力行使の公的な行政権を認める、十月宣旨の存在があつた。

義仲を平家との合戦中に京へ戻らせ、法住寺合戦へと追い詰めていった、頼朝と法皇の義仲滅亡を謀る行為が『玉葉』に記されている。物語はこれを、「院ノ切人」をしていた行家の、「イタチノナキ間」を突く卑怯な行為として、描き出している。

そして、史料では正式な平家追討軍としての行家播磨下向は、「木曾ニ違フム」為、義仲から逃げるようにしての出京とされる。この後都で義仲は、源氏狼藉の為の院庁からの責めを一身にうけ、法皇との対立を深め、その結果、法住寺合戦へと追い込まれていく。行家は、義仲の滅びを促進する存在として、設定されているといえる。

#### 四 義経との都落ちと「心替」

義仲の最期以降、行家の動向は、しばらく物語に描かれない。次に登場するのは、頼朝によって都を追われる義経と共に、第六末十二「九郎判官都ヲ落事」の場面である。

緒方、白杵、経統、松浦党以下、鎮西ノ輩、義経ヲ以テ大将トスベキヨシ、宁御下文被成下ニケリ。

義経畏テ賜テ、三日、事ノ由ヲ申入テ、京中ニ少モ煩ヲイタサズ、卯時計ニ洛中ヲ出ニケリ。備前守行家、惟澄、惟栄ガ一族相伴フ。彼是凡ノ勢、僅ニ五百余騎ゾ有ケル。関東ニ志アル在京ノ武士、近国ノ源氏等追懸テ射ケレドモ、事トモセズ。散々ニカケテラシテ、川尻マデハ着ニケリ。大物浦ニテ船ニ乗テ、鬼海、高麗、新羅、百濟マデモ落行ナムト思ケレドモ、平家ノ怨靈ヤ強カリケム、折シモ西風ハゲシクシテ、大物浜、住吉浜ナムドニ打上ラレテ、船ヲ出ニ不及ケレバ、摂津国源氏、豊嶋冠者ヲ始トシテ、太田、石川ノ若者共、雲霞ニテ追懸テ、当国小溝ト云所ニテ戦ケレバ、伴ヒタル伊栄行家ヲ始トシテ、白杵経統心替シテ引別ニケレバ、与力ノ輩皆チリトニ成リニケリ。

まず「緒方、白杵、経統、松浦党以下、鎮西ノ輩、義経ヲ以テ大将トスベキヨシ、宁御下文被成下ニケリ」とされているのは、義経が、院に申請したことによるものである。

判官院御所ニ参テ、大藏卿泰経ノ朝臣ヲ以テ申ケルハ、「略」京都ニ候テ時政ヲ待付候テ、イカニモ成ベク候ヘドモ、君ノ御為人ノ為、其煩有ベク候ヘバ、西国ヘ罷下候ワバヤト存候。宁御下文給リ候ナムヤ。豊後国住人伊澄、伊栄等ニ始終見放ズ心ヲ一ニシテ、カヲ合スベキ由、仰下サルベク候。（略）  
（第六末十二「九郎判官都ヲ落事」）

この、義経が「始終見放ズ心ヲ一ツニ」することを願った人物、伊澄・伊栄は、『吾妻鏡』元暦二年一月十二日条に、豊後国の住人白杵二郎惟隆・同弟緒方三郎惟栄は、志源家にある由、兼ねてもつて風聞するの間、船をかの兄弟に召して、豊後国に渡り、博多の津に責め入るべき旨、議定あり。

とみえ、伊澄は惟隆と同人物かと思われるが、範頼が平家を攻める際に、周防から豊後へ渡ることに協力した、北九州の源氏方の勢力である。義経が九州で勢力挽回を計るために、どうしても味方につきたい者達であった。

また、この御下文の以前には、義経に頼朝追討宣旨が下されている。

判官モ「始終ヨカルマジ」ト思給ケレバ、頼朝ヲ追討スベキ由宣旨ヲ下サルベキ旨、大藏卿泰経ヲ以テ、後白川院ニ判官申サレタリケレバ、十六日、右大弁光雅朝臣院宣ヲ承テ、從二位源朝臣頼朝卿ヲ追討スベキ由ノ院宣ヲ下サル。

（第六末八「判官二位殿不快事」）

頼朝追討宣旨と御下文の下賜を行い、義経の都落ちまで、義経を擁護している院が描かれていることに注目する。

御下文が下され、義経出京のとき、「備前守行家、惟澄、惟栄ガ一族相伴フ」と、行家が登場する。ここまで、行家が義経とともに描かれることは延慶本においては一度もないが、史料には、このとき行家と義経が同盟関係にあったことが記されている。

『玉葉』文治元年十一月二日条では、

義経明曉鎮西に向ふべし。その間聊か申請の旨あり。（略）抑山陽西海等の庄公、共に義経の沙汰となし、調庸祖税、年貢雜物等、慥かに沙汰進上すべき由、仰せ下されんと欲す。兼ねて又、豊後の武士等、院に召され、義経行家等、殊に扶持すべき由仰せ下されんと欲すといへり。件の兩条仰せ下さるや否や、宜しく計らひ奏せしむべしといへり。

傍線部に見られるように、義経は、院の御下文を義経と行家に下されるよう求めていた。さらに、十二月二十七日条に記される頼朝の書状から、

(略) 義経を以て九国の地頭に補し、行家を以て四国の地頭に補せられ候ふ条、前後の間、事心と相違し、かの輩各その柄を相憑み、非分の謀を巧み、下向せしめ候ふ刻、指して寄せ攻むる敵無しと雖も、天の譴め遁れ難く、船に乗り纜を解きし時、海に入り浪に浮び、郎従眷属、即時に滅亡せしめ候ふ条、誠に人力の及ぶ所にあらず、已にこれ神明の御計りごとなり。

義経は九国の地頭に、行家は四国の地頭に補されており、院庁が、義経の申し出を容れ、行家と義経二人に、都落ちに際してできるだけだけの権限を与えていたことが分かる。

また、行家と院のつながりに関して、『玉葉』寿永三年二月三日条に、

今日行家入京す。その勢僅かに七八十騎と云々。院の召しに依りてなり。

とあり、義仲が討たれた後も、行家と院の結びつきは続いていた。

物語では、このような行家の存在は消え、義経のみに照明が当たる。行家は、「相伴フ」輩として、義経についていくという設定である。

こうして義経と共に都落ちした行家らであるが、

伊栄行家ヲ始トシテ、白杵経続心替シテ引別ニケレバ、与力ノ輩皆チリぐニ成リニケリ。

と「心替シテ」「引別」れると描かれる。

この場面を、史料の記事と比較する。『玉葉』文治元年十月八日条、

伝へ聞く、義経行家等、去る五日夜乗船、大物辺に宿る。追ひ行く武士等、近辺の在家に寄宿す（略）。未だ合戦せざる間、夜半より大風吹き来たり、九郎乗る所の船、併しながら損亡し、一艘として全き無し。船過半海に入る。その中、義経行家等、小船一艘に乗り和泉の浦を指し逃げ去り了んぬと云々。家光に於ては梟首し了んぬ。豊後の武士等の中、或は降人になり、範資の許に來たり、又生きながら捕取せられ了んぬと云々。

義経と行家は、小船一艘に乗り共に逃げたとされており、行家に「心替」したことは記されない。また、『吾妻鏡』文治元年十一月六日の記事では、

行家・義経、大物の濱において乗船の刻、疾風にはかに起りて、逆浪船を覆すの間、慮外に渡海の儀を止め、伴類分散して、豫州に相従ふの輩わづかに四人、いはゆる伊豆右衛門尉・堀彌太郎・武蔵房弁慶ならびに妾女字は静。一人なり。

「伴類分散して」と記されるが、「心替」という積極的な行為は書かれない。

次に諸本の記述を比較すると、長門本、源平盛衰記、四部合戦状本、覚一本ともに「義経・行家その行方を知らず。」と記している。四部合戦状本においては「白杵・緒方変心して引き分かれければ、与力の輩皆散々に成り行きけり。（中略）義経・行家は、其の行方を知らず」と、「変心」という言葉がみえるものの、「白杵・緒方」の変心であり、行家にはあてはめられていない。

延慶本では、豊後武士と、行家が「心替」した為に、義経は、都落ち後の勢力基盤を失い、孤立させられ、吉野へ落ちていくことになる。

そしてこの後、行家義経追討宣旨が下されたことが記される。

十二月六日、美乃近江両国ノ源氏等、義経行家ヲ追罰ノ為ニ西国ヘ下ル。山陽南海西海三道ノ国々ノ輩、彼ノ兩人ヲ召取テ可献之由、院宣ヲ下サル。其狀ニ云ク、前備前守源行家、前伊予守同義経等、野心ヲ挟ミ、遂ニ西海ニ趣テ、摂津国ニオイテ纔ヲ解ク之間、忽ニ逆風ノ難ニ逢フ。誠ニ是一天ノ健也。漂没ノ聞、其説有ト雖モ、命ヲ損スノ実、猶疑無キニ非ズ。早く從二位源朝臣ニ仰テ、不日ニ在所ヲ尋不搜リ、其身ヲ提ゲ搦メシメヨ者。

文治元年十二月六日 右中弁

(第六末十三「義経可追討之由被下院宣事」)

「早く從二位源朝臣ニ仰テ」と、頼朝に対して仰せ付けられていることに注目する。ここで頼朝は、義経と行家を追討する、正式な権限を法皇より得た。義経を擁護していた法皇は、義経都落ち後、頼朝へと翻ったのである。

『吾妻鏡』では、院の御下文が下賜され、義経が離京した後、次のような記事が記されている。文治元年十一月五日条、

関東より発遣の御家人等入洛す。二品忿怒の趣、まづ左府に申すと云々。

院に対し、激怒している頼朝の様子が伝えられている。

そして『玉葉』では、行家義経追討宣旨が下される前、文治元年十一月九日の記事に、

院より頼朝の許に御使を遣はさるべき由、その定めあり。経房卿、光長朝臣、定長等その謀を廻すと云々。又澄憲法印同じく沙汰を廻すと云々。而るにこの輩皆停止。若宮の別当丸（頼朝の近臣、日来在京すと云々）、昨朝遣され了んぬ。その御定の趣、人知らず。最密の事と云々。

内容は分からないながら、法皇からの、御下文に対する弁解・行家義経追討宣旨についての取り決めがあったかと推察される。また文治元年十一月二十六日条の、頼朝の書状には、

行家義経の謀叛の事、天魔の所為たる由仰せ下さる。

と記されており、院庁が、頼朝追討宣旨や、行家と義経の地頭任命などの行為を、ほかそうとしていることが窺える。

この場面の背景には、頼朝の圧迫を受けた法皇の、義経から頼朝への、心変わりというべき行為がある。延慶本では、御下文で命ぜられた豊後武士たちの「心替」で、御下文の効力がなくなることが表され、また院とつながりのあった行家に、「心替」という行為があてはめられている。これらのことにより、義経の再起は不可能なものとなり、義経は滅亡への一途を辿っていく。

## 五 頼朝による常陸房昌命への流罪と「面目」

行家は、頼朝に拒絶され、その許を去った後、義仲そして義経の許へと赴き、それぞれの滅亡を促進させていった。そして行家自身、院宣により謀反人となり、頼朝の使者によって討たれることになる。

行家最期の場面、第六末廿二「十郎藏人行家搦ラルル事付ケタリ人々解官セラルル事」の末尾には、頼朝による行家の死後処置の記事が置かれている。行家の誅罰をいかに扱うかは、頼朝にとっての問題であり、行家が関わっていないものではない。しかし、延慶本が行家の死をどのように描くかを明らかにするために、取り上げたい。

本文を引用する。

昌命、十郎藏人ノ首ヲ持セテ、鎌倉ヘ下リタリケレバ、「神妙也」ト感ジ給ケレバ、「イカナル勳賞ニカ預ラムズラム」ト、人々申ケルニ、勳賞ニハ預ラズシテ、下総国葛西ト云所ヘ流サレニケリ。諸人、「コハイカナル事ゾヤ」ト、驚申ケレドモ、其心ヲ知ラズ。二年ト申ニ、「行家誅タリシ僧ハ、下総国ヘ流シツカハサレニキ。未アルカ、召セ」トテ召返シテ、鎌倉殿ノ宣ケルハ、「イカニワ僧、ワビシト思ツラムナ。下臈ノ身ニテ、大將タル者ヲ誅ツルハ、冥加ノナキ時ニ。和僧ノ冥加ノ為ニ流遣タリツル也」トテ、勳賞ニハ、摂津土宅庄、但馬国ニ太田庄、ニヶ所ヲゾ給タリケル。是昌命ガ面目ニアラズヤ。

「昌命」は、この前に記される、行家との戦いの場面で初めて登場する。

〔北条ガ甥ニ北条平六時定〕又大源次宗安ヲヨビテ、「何哉、己ガミヤダテタリシ山僧ハ有カ。召テ参レ」トテ、宗安ヲ遣ス。是ハ西塔法師ニ常陸房昌命ト云者也。〔延慶本廿二「十郎藏人行家擲フル事付ケタリ人々解官セラルル事」〕

傍線部にみられるように、「西塔法師ニ常陸房昌命」という人物で、

藏人息ヲシズメテ、「抑ワ僧ハ山僧カ、寺法師カ。又鎌倉ヨリノ使カ、平六ガ使カ」。「鎌倉殿ノ御使、西塔北谷法師、常陸房昌命ト申者也」ト云ケレバ、

(同右)

「鎌倉殿ノ御使」と、自身を称する。しかし、『吾妻鏡』文治二年三月廿七日条の、時政による洛中警護の勇士選定のなかに、「ひたちはう」の名がみえるので、当時は時政配下の者であつたようである。

この昌命が、行家を誅し、頼朝の許へ首を届けたところ、



勸賞ニハ預ラズシテ、下総国葛西ト云所へ流サレニケリ。

という処置が下される。

このとき、昌命が葛西へ流されたことは、管見の及ぶ限りでは史料に確認できない。『吾妻鏡』文治二年九月十三日条、行家誅罰から約四ヶ月後の記事に、

最勝寺領越前国大蔵庄の事、北条四郎時政の代時定、ならびに常陸房昌明等、押領を致すの由、寺の解を副へて、院宣を下さるるところなり。よつて御沙汰を経られ、自今以後、時政地頭職を知行すといへども、本寺の下知を忽緒すべからず。早く新儀の無道を停止し、本寺の進止に従ひ、年貢課役の勤めを致さしむべきの由、仰せ下るところなり。

とあり、昌明が越前国にいたことが記されており、時政の代官時定と共に行動していることから、流罪はなされていない可能性がある。また、行家誅罰からちょうど二年後の、文治四年六月十七日条、

常陸房昌明は、近年京都より参るところなり。元延暦寺に住す。武勇にてその名を得るなり。中就前備前守行家を誅して以降、人之を憚ると云々。

昌命は京都にいたことが分かり、やはり流罪が行われた可能性は低い。

このころ昌命が鎌倉に来ていた、ということに注目する。昌命の流罪は、行家を討った後鎌倉を離れていたこと、そして二年近くたって鎌倉へ戻って来ていたことが元になった、創作ではないだろうか。

二年後、昌命を召し還した頼朝は、流罪の真意を語る。

イカニワ僧、ワビシト思ツラムナ。下臈ノ身ニテ、大将タル者ヲ誅ツルハ、冥加ノナキ時ニ。和僧ノ冥加ノ為ニ流遣タリツル也。

身分の低い者が、大将を討つことは、冥加の無くなる行為であるとし、昌命の冥加を失わせない為に、流罪を処したと明かされる。行家を誅した、昌命の冥加を重んじる頼朝が描かれている。

そして昌命には所領が与えられ、「是昌命ガ面目ニアラズヤ」と結ばれる。これは、延慶本独自の文章である。昌命に処せられた一旦の流罪は、頼朝の昌命への温情からなされたものであり、改めて勳賞を賜ったことは、昌命にとってこの上ない「面目」であると評される。この一文により、頼朝の昌命に対する計らいが、賛えられているといえよう。

行家の誅罰は、その末尾に置かれる昌命の流罪を介して、頼朝礼賛へと繋がっている。

## おわりに

延慶本の家行は、平治の乱雪辱を期する、源氏の嫡流頼朝と義経に繋がる存在として、登場する。その人物は、夜討強盗、所領無心する、堕ちた武士であり、まず頼朝を侍んで退けられ、頼朝から離反する。次いで侍んだ義仲に引き受けられるも、義仲不在の時を狙い、「院ノ切人」をして法皇に義仲誅罰を勧め、また義経に伴って都落ちするも、たちまち「心替」して義経を裏切る。こうした行家の行為によって、義仲、義経の滅亡が促進されていった。そして行家を退けた頼朝が、一人台頭していく。

史料では、義仲、義経に対する延慶本の家行の行為は、頼朝が法皇と結んで行った、義仲、義経滅亡の企てとして

記されている。延慶本では、この頼朝の画策は描かれず、行家が引き起こしていった源氏内部抗争によって、義仲、義経が減び、頼朝政権の誕生が導かれるという構造となっている。

そして頼朝の行家誅罰の際には、行家を討った昌命に流罪が設定されている。それは昌命に対する頼朝のこの上ない配慮であったとされ、頼朝が賛えられていく。

註(1) 吉田晴洋氏「平家物語研究——十郎藏人行家像——」〔緑岡詞林〕十九 青山学院大学日文院生の会 一九九五年三月)

(2) 佐倉由泰氏「『平家物語』における行家」(人文科学論集文化コミュニケーション学科編『信州大学人文学』三〇 一九九六年三月)

(3) 服部幸造氏「信太先生義憲」(『伝承文学研究』十七 伝承文学研究会 一九七五年二月)

(4) 早川厚一著『平家物語を読む——成立の謎をさぐる——』(和泉書院 二〇〇〇年三月)

(5) 前掲(1)、吉田晴洋氏論文

(6) 赤松俊秀著『平家物語の研究』(『頼政説話について——平家物語の原本についての統論——』法蔵館 一九八〇年一月)

(7) 櫻井陽子著『平家物語の形成と受容』(『及古書院 二〇〇一年二月』)

(8) 行家が、陸奥十郎と呼ばれるのは、吾妻鏡でこの箇所だけであり、また他の資料においても確認できない。可能性として、平治物語(中 学習院大学図書館蔵本)に、義朝の頼む兵として二回、行家とともに呼び出される、義家六男の「陸奥六郎義隆」との混同が考えられる。

(9) 石井進著『日本中世国家史の研究』(岩波書店 一九七〇年七月)

(10) 角田文衛氏は、『平家後抄——落日後の平家』(朝日新聞社 一九七八年九月)の中で、「為義の子・十郎藏人行家(初めの名は義盛)は、為義の娘の子、第十九代熊野別当行範らに匿って貰い、平家の眼から逃れていた」と、平治の乱後の、行家の行状について解析されている。

(11) 中村理絵氏は、「延慶本平家物語にみる「謀叛人頼朝」から「將軍頼朝」への転換——第四「十七 文学ヲ使ニテ義朝ノ首取寄事」を契機として——」(『軍記物語の窓』第二集 関西軍記物語研究会編 和泉書院 二〇〇二年十二月)の中

で、延慶本では、「父恥」を雪むべき者として、頼朝、義経が同格に扱われている」と指摘されている。このことは、延慶本において、頼朝と義経とが特別視されていることを示している。

- (12) 武久堅氏「木曾義仲受難の選択——「人質・清水冠者の派遣」——」（『日本文藝研究』第五十五巻第四号 関西学院大学

日本文学会 二〇〇四年三月）

- (13) 前掲(12)、武久堅氏論文

本稿における本文引用は、延慶本は『延慶本平家物語 本文篇』（北原保雄・小川栄一編、勉誠出版）、長門本は『平家物語の総合研究 第二巻校注篇』（麻原美子編、勉誠出版）、源平盛衰記は『新訂源平盛衰記』（水原一考定、新人物往来社）、四部合戦状本は『訓読四部合戦状本平家物語』（高山利弘編著、有精堂出版）、覚一本は『平家物語』（日本古典文学大系、岩波書店）、吾妻鏡は『全譯 吾妻鏡』（貴志正造訳注、新人物往来社）、玉葉は『訓読 玉葉』（高橋貞一著、高階書店）、『宇津保物語』（新編日本古典文学大系、小学館）による。

付記 本稿は、関西軍記物語研究会 第五十二回例会（二〇〇四年十二月十二日 於 京都女子大学）での口頭発表に基づき、加筆修正を施したものです。席上御教示を賜った諸先生方に、厚く御礼申し上げます。

（ひらぎ みやこ・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程）